

文化祭のシンクロ公演。水泳部女子がおっぱいポロリし、激写される

「ダンス部とか、吹奏楽とかもそうだし、美術部とかもそうだよ。私たちもなんかやりたいじゃない」

R 高校水泳部 2 年、荻原心春がそう言った。

「そうはいつでもなー」

「俺も嫌だなー」

「私もちょっと」

他の水泳部員は乗り気ではなかった。

「せっかくの文化祭だよ。青春の一ページだよ。

プールは空いてるんだし、シンクロやろうよー」

夏の終わり、秋口に行われる文化祭で、水泳部で出し物を行う案が出ていた。

といっても、その案を出したのは、荻原心春一人で、言っているのも荻原一人だったが。

「でも、シンクロなんてホントにできんの？」

「できるよ、男女混合でみんなでリフトとか練習すればできるって」

荻原心春がそう言うと、男女混合という言葉に男子部員たちが反応した。

R 高校水泳部は、部員が全部で 14 人だ。

少数というわけではないけど、多いわけではない。

シンクロ公演を文化祭でやるとしたら、全員出ないといけなくなる。

「えーっ。私らも出るのー。嫌だっー」

女子部員たちが言う。

「そうだよー。文化祭って撮影は自由だから、水着姿とか撮られちゃうじゃん」

「そんなん気にしてたら駄目だよ」

荻原心春が熱弁する。

「それに私たち水泳部だよ。水着なんかいつも着てるし、それを撮られてもどうってことくない？」

それは確かにそうだったのだが、水泳の試合の日に水着になるのと、文化祭の出し物で水着になるのでは、話は違っていた。

女子部員たちは、そのことを言いたかったのだが、荻原心春には通じていないようだった。

結局、荻原心春の熱意に押し切られるような格好で、水泳部は文化祭でシンクロ公演を行うことになった。

男子部員たちは、練習中に女子の体に触れられたり、ハプニング的に、おっぱいに触れたりすることを期待していたけど、そういったことはそれほどなかった。

でも、ゼロではなかったもので、男子部員たちにとっては、いろんな意味で、シンクロの練習は楽しかった。

女子部員たちも、初めの頃は、不満を言っていたけど、いざ、練習を始めてみると、意外と、懸命に取り組むようになっていった。

とはいっても、シンクロだと普段水泳で使っている筋肉とは別の筋肉を使うことになる。

毎日、みんな筋肉痛だったし、自分のクラスの

出し物や活動と並行する形での、シンクロ練習だったので、かなり大変だった。

「最後の三段タワーのところが一番の見せ場だからね。京香ちゃん、頑張ってね」

荻原心春がそう声をかけた。

「もう。なんで私が」

声をかけられた、宮部京香が言った。

最後の三段タワーの一番上に登る役に選ばれたのが、宮部京香だった。

水泳部の中で一番小柄だったので、宮部京香が選ばれた。

「絶対、写真とかいっぱい撮られるじゃん」

宮部京香が不満を口にする。

「いいじゃん。青春だよ」

同じ2年の荻原心春がそう言った。

（そんなに言うのなら、心春が一番上やればいいのに）

宮部京香はそう心の中で思っていた。

でも、荻原心春は、割と大柄だったので、三段タワーの一番上に登るには、少し無理があった。

荻原心春はバストも豊かだった。

一方、宮部京香は貧乳だった。

水泳をずっとやっているのに、肩は大きく盛り上がっているけど、その分、胸の貧相さが際立っていた。

そんな、劣等感が宮部京香の心にはあった。

（なんで私が三段タワーの一番上をやらないといけないんだろう）

（そもそもシンクロ公演なんてやりたくないし）

(っていうか、やっぱ心春ちゃんって、ちょっとうざいよね)

宮部京香の心の中で、そんな思いが少しずつ高まっていく。

宮部京香はあることを思いついた。

そのことを実行するためには、男子の協力を取り付けなければいけなかった。

最低でも 2 人の男子に手伝ってもらわないといけない。

でも、男子たちにとっても、それは悪い話ではなかった。

文化祭当日の日がやってきた。

水泳部のシンクロ公演は、かなり目玉企画となっているようだった。

開始時刻が近付くにつれて、プールサイドには溢れんばかりの人だかりとなっていた。

プールサイドに入りきれない人は、校舎の中のプールが見える窓に張り付いて、見ている人も大勢いた。

R高校の文化祭は、一般の人でも入れるし、撮影も自由だった。

だから、ちょっと変な人も一部混ざっていた。

現役女子高校生の競泳水着姿を堂々と、撮影できるので、そういうエロ目的の人たちもかなりの数押し寄せていたのだ。

「やっぱ嫌だなー」

「お客さん、いっぱい来てるって」

「嘘一」

出番を待つ、女子部員たちが競泳水着に着替えた後、プール脇の更衣室で話している。

競泳水着はハイレグなので、股間は、かなりきわどい。

見に来ている観客は、ほぼ全員手にスマホを構えていたし、明らかに高価そうなしっかりとしたカメラを構えている人も何人かいた。

シンクロ公演、開演の時間となった。

にぎやかなBGMとともに、登場してきた水泳部員 14 人。

カメラのフラッシュがたかかれていた。

特に女子部員には、カメラが多く向けられていた。

観客の男子生徒たちは、あからさまに鼻の下を伸ばしている。

エロ目的で高校に侵入している人は、女子部員の股間や胸のあたりをアップで撮影していた。

撮影 OK なので、その撮影っぷりは容赦なかった。

宮部京香はそんな様子を見て、嫌な気分になっていた。

それでも、この後、起こる出来事がすべてをひっくり返してくれるはず。

そう思いながら、演技を進めていく。

水泳部のシンクロ演技は問題なく進んでいった。

一列に並んで、リズムに合わせて手を広げた

りするところは、今までで一番きれいに決まった。

そして、最後の三段タワーへとさしかかる。

「ちょっと、私やっぱ無理。誰か替わって」

宮部京香が、三段タワーに登る直前にプールの中でそう言った。

「どうすんの。がんばってよ、京香」

荻原心春が心配そうにそう言った。

「おい、ダラダラしてる時間ねえぞ」

「もう、荻原、お前がのぼれ」

手はず通りに男子部員たちが話を進める。

「えーっ。私」

「早く、急げって」

荻原心春が戸惑いながらも、土台を作っている男子部員の足にのっかり、さらに、肩に登っていく。

宮部京香はニヤツと心の中で笑っていた。

（行ってらっしゃい、心春。あんたはもう、女として終わっちゃうよ）

バランスをなんとか保ちながら、荻原心春が慎重にタワーを登っていく。

もちろん荻原心春は三段タワーの練習なんてしたことはない。

一発ぶっつけ本番状態だ。

荻原心春は持ち前の運動神経を活かして、なんとか、一番上までたどり着いた。

そして、そこで、両手を男子たちから離して広げる。

「おおっー」「すげー」「かっこいいー」

観客たちの歓声が上がっていた。